

高知県四万十町における「多様な農家」の組織化に関する取り組み

○岡村健志（高知大学）・武田正人（四万十町役場）・横山光一（四万十町役場）

1. はじめに

本稿では、「多様な農家」が参画する四万十町農業者ネットワークの取り組みとともに、大学との関わりについて紹介する。

四万十町は高知県西部の四万十川中流域にあり、高知市から西に約 70km、車で約 1 時間離れて場所にある。人口は 15,607 人（2020 年国勢調査）で高齢化率が 45%である。農業が盛んな地域で、経営耕地面積は 1,740ha、農業経営体数 1,194（2020 年農林業センサス）といずれも高知県内で 1 位、2 位争う。主要な農産物は米、ショウガ、ニラ、豚などで、ショウガの生産量は日本一である。こうした農産物は、農業協同組合による系統出荷のほか、民間企業や農事組合法人らによって栽培、販売されているほか、有機農産物なども盛んで、四万十町では多様な農業が展開されている。一方で、過疎化に伴い、農業の担い手や耕作放棄地の拡大といった問題が顕在化し、農業の持続性が危ぶまれる状況にもある。

このような状況において、四万十町では、多様な農業者が参画する任意団体「四万十町農業者ネットワーク」が設立された。

2. 四万十町農業者ネットワークの概要

四万十町農業者ネットワークは「栽培方法や出荷先などに違いがあっても、同じ四万十町内で暮らす農業者として、お互いに学び合い、違いを認め合える関係性づくりと新たな挑戦の場づくりを目標とします。」¹⁾を掲げ、2016 年に四万十町役場が実施する四万十町人づくり戦略の一貫として始まった。図 1 にコンセプトを示す。四万十町農業者ネットワークは、これまでの枠組みを越えた活動の場づくり事業である。一言に農家と言っても、慣行や有機といった農法や、系統出荷や系統外出荷といった流通、個人や法人といった経営体など農業の形態は多様である。特に四万十町は、系統外出荷の取り組みも盛んで、有機農法や自然農法を行っている農家も数多くいる。

これまでの活動内容と実施回数を表 1 に示す。これまでの活動を整理すると、「情報交換」「勉強会・研修」「試験・研究」「展示商談会」「販売」「商品開発」「新作物の導入」に分類できる。

2016 年度は主に企画づくりと農家への参加呼びかけを行い、2017 年度より情報交換やグループワーク、勉強会を始めた。2018 年度からは、物流・販売部会と生姜部会を設立した。物流・販売部会では県外での商談会開催や展示会出展に加え、量販店へのイベント出店などを実施した。生姜部会では、産地の視察研修のほか、町や県などが実施する土壌環境調査や土壌病害対策実験に参加した。こうした取り組みをもとに、2020 年度からは四万十町農業者ネットワークを任意団体として設立するとともに、「四万十組」（図 2）の名称で活動を始めた。2022 年 11 月現在、会員は 50 名で、都内で開催するマルシェに出店するほか、新商品開発や販路開拓に向けて取り組んでいる。

3. 自治体と大学の関わり

四万十町農業者ネットワークは四万十町役場が人材育成戦略²⁾のもとで取り組んだ事業のひとつである。企画当初から、高知大学では地域コーディネーターである筆者が四万十町からの受託研究として取り組んだ。四万十町役場と高知大学は、四万十町農業者ネットワークの企画や活動の場づくりを行っており、いわゆる事務局の役割を担っている。取り組み当初の四万十町役場の担当者は生姜栽培や農業施策に精通しており、地域コーディネーターは過去に加工食品業による新産業開発に関わった経験を持つ。こうした互いの技術や経験、人脈を活かし、取り組み当初から、四万十町役場と定例で進捗状況の共有や意見交換を行い、勉強会や販売活動の企画を立案してきた。

また、四万十町農業者ネットワークの取り組みを通じて、四万十町と高知大学は、ショウガ圃場の土壌環境や微生物環境に関する共同研究を実施するに至った。ショウガは根茎腐敗病による病害リスクが大きい。根茎腐敗病は、既存の病害対策の効果は限定的で、一度感染すると壊滅的な被害に発展する可能性がある。こうしたなかで、学術的なアプローチで、生姜圃場の土壌や微生物環境を明らかにし、病害対策を探っている。この研究には、高知大学から、土壌学や微生物学、食品化学の研究者が関与し、調査対象圃場として四万十町農業者ネットワークの会員が参加している。

4. まとめ

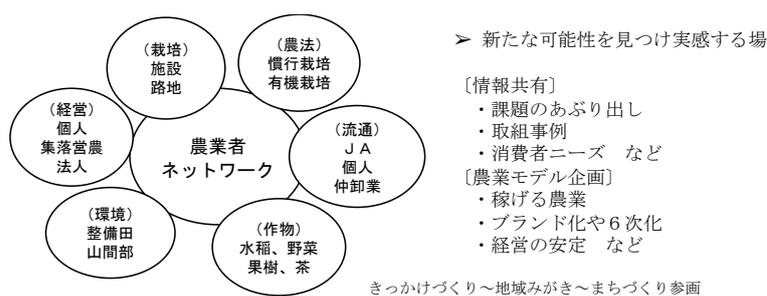
本稿では、「多様な農家」が参画する四万十町農業者ネットワークの取り組みと大学との関わりについて紹介した。四万十町役場の声掛けから始まった取り組みは、任意団体の設立に繋がり、情報交換や勉強会中心だった活動から販売や商品開発といった実業への活動に発展しつつある。一方で、こうした発展は、多様な農家が参加した組織であるため、参画できる農家が限られている。勉強会や意見交換などは多くの農家が参加しやすい一方で、例えば、品目に限った栽培の試験や六次化などの取り組みとなると、参加できる農家が限られてくる。

大学は、コーディネーターが場づくり事業の開発やマネジメントに関与している他、コーディネーター活動での経験を活かして、商品開発などの専門人材の導入、新作物導入や土壌研究といった取り組みの拡大につなげた。また、大学からは土壌、微生物、食品化学などによる研究を通じた専門的な関与により、これまで農家の経験から語られてきた病害の原因や味の違いなどを、学術的に明らかにしつつある。

今後も、四万十町農家、自治体、大学など取り組みを担う主体が連携しつつ、四万十町農業者ネットワークの活動を継続していきたい。

表1 四万十町農業者ネットワークの活動内容と実施回数

年度	情報交換	勉強会・研修	試験・研究	展示商談会	販売	商品開発	新作物の導入
2017年度		2	3				
2018年度		4	4		1		
2019年度		4	3		1	3	
2020年度		6			1	2	1
2021年度		9				1	2
2022年度		3				4	2



☞ 「総合振興計画」活力ある産業が育ち、にぎわいのあるまちづくりへ
～ 特色ある農林水産業を生かすまち ～
地域資源を生かし安全・安心で高品質な農産物を生産するまち

図1 四万十町農業者ネットワークのコンセプト
(四万十町役場資料¹⁾より抜粋)

海山川、土と根っこをつくる人。



図2 四万十組のロゴ

【参考文献】

- 1) 四万十町人材育成推進センター, 四万十町農業者ネットワーク-活動紹介-, 2020, 7p.
- 2) 四万十町人づくり委員会, 四万十町人づくり戦略, 2016, 5p.